る研究が今後増えると期待している。今までベトナムの日本研究は、日本（国際交流基金、各民間財団など）から客員教授派遣、ベトナム人の訪日研究、日本語文献の提供、日本文学作品翻訳・出版支援などという形で支援を受けてきた。ただ、日本語文献が非常に不足している上に、日本語教材が効果的に使用・開発されていないため、ベトナムにおける日本教育・研究はまだ不十分・不確実な状況であると考える。

さらに、高度人材の育成及び社会に出てから役に立つ知識を教えるという「有益な」、「実利」教育が支配的な現在の日本語教育形態の中で、学術的な日本研究が充実することを願っている。国内外の発展状況の変化に直接的な影響を受けるベトナムにおいて、日本語教育・日本学は今後どのように展開されているだろうか。また、日本経済、日本史、日越歴史関係などの研究が多いと感じるが、伝統的な価値がある古典文学に対して、一般市民がもっと親近感を持つようになって欲しいと願っている。

【まとめ】

グローバル化の進展に伴い、日本学が世界に普及している中、日本語学習者が急速に増えているベトナムでの専門的な日本言語教育・日本学の研究が更に探究・発展・飛躍されることを願っている。日本語を理解し、日本語の文献や日本に関する新たな教育・研究情報に接触することができ、研究を行うことのできる研究者が今後求められている。社会に出てから実際に役に立つことが重視され、「有益」で、「実利的」な教育が支配的な現在のベトナムの日本語教育において、利益追求でない、専門的な日本学の研究を充実化することが必要である。特に日本学に焦点して、日越比較研究を強化させ、学術交流を積極的に進めれば、ベトナムにおける日本研究者を育てることもできると考える。

（ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学講師／国際日本文化研究センター外来研究員）

「思煩之時」―礼儀作法の歴史を文書から研究する意義について

マルクス・リュッターマン

日常茶飯事、衣食住の細々な作法から倫理、法律などに至

るまで、規範が行動や良心に作用する。学問では伝統の賛美、同一感、誇り、規範的で思想的なリゴリズムを目指さず、飽くまでも知的好奇心に答える思索を心得るので、礼儀作法をどのように研究するか、一例でもって確認したい。

『禮記』を始め、宋・唐時代の多くの立成・書儀でも端的に明示されるように、作法には社会秩序を中心にする思想の根源的な意義が寄せられている。『禮記』（第一巻、曲禮）の名言「人に礼ありては即ち安ず。礼無くんば危うし」というように人類の普遍的な礼儀作法はさらに合理化・概念化されてきた。中国諸国・朝鮮半島・日本列島の礼思想の徹底は周知のこと。文通は礼儀の域に離れがたく結びついている。主な史料を文書（もんじょ）といい、ある見方に寄れば現代の電子メールとの共通点もあるが、もっぱら機能論的には妥当だと思われる。だが、もちろん文書にあって電子メールにない要素もまた多々ある。

例えば、守覚法親王（一二〇二年没）が三條禅門と忠親公なる者に尋ね、書状を認める作法に関する諸説を集め、御記に止めた。『消息耳底秘抄』という。後世の手に渡って、秘すべき記録として伝授された。嘉禎三年付の書写の後書きによれば、六月の異例に涼しい二三日にて霖雨が一〇日ほど続いたところ筆を擱いた。暗い空の年月は実に永く、耳底にして口外しない特権的な教養階層の埒を漏れなかったとはいえ、近世に入って有名な『群書類従』に収まり、言わば江戸時代の新風の空のもとで蒙が啓けた。文書模範の伝来とは別に、『消息耳底秘抄』は最も古いと思われる日本語による書礼規範の書である。手紙の宛て方、仰せ書き聞き取りの習い、女房への文で覚えるべきことなど、諸説の拘りや、細かくても包括性に欠ける条目を見れば、特権的に利用を許された公家さんは果たして安心して参考に入れられただろうか。

Charles Darwin 著 *The Origin of Species* の第三巻で議する *struggle for existence*（生存競争）を広く、生命の最善および悩みの無い心地を狙う営みとして捉えなおせば、文化に通じるとする見解がある。人間の生存を保証する多岐にわたる戦略と戦術を例えて、農地「開発」（culture）、「都市化」（civilization）、「文化」、「文明」などと称する。つまり耕し、共同体、文字などの比喩を借りて、飢え、乱れ、無学などによる苦悩を乗り切る各種の行いをいう。生存の苦労をめぐって生き物が言わば本能的に進化する過程を自然（nature）とするのに対して、知能的で、認識的に進化する過程を文化と位置付ける。なお、動物の行動学では表象分析が展開してきた

結果、学習の能力の多段階も認め、カルチャーとネイチャーの間をナーチャー（nurture、育成の各条件の作用）と称して、軍配を先天か学習意識かに上げることを決めかねる域のネーミングも導入された。

いずれにしても、医療、天文、資源開発、エネルギー対策などを科学に加えても、そのどれも人間の認識論に答えて文化的行為と見なす。生存の有様を苦悩から解放して、無悩へ案内する術を見出す試行錯誤の全体を省みるのが文化科学の役目。外的自然（日照、地震、台風など）とも内的自然（利害衝突、強制、戦いなど）とも接してきた経緯を学習の歴史として捉える観点から諸要素が文化学の研究域に属する。道徳や法律などの規範と同様に政治、美術、法律、物理、思想、文学などのあらゆる学問も運動源を苦悩から得て、方向性は安楽無苦の想定から得ると言えるかも知れない。礼儀作法もまた例外ではない。そしてコミュニケーションも生存及び安楽化の試行として意識の進化に作用した。先述の秘抄類は日本語史料の伝授、故実、文書に反映している学習歴の遺産であり、人類文化に貴重な経験を資している。文化研究は人類の試行錯誤や、それへの日本史料の提供している情報を無変の構造として把握するか。かえって行動進化を遂げるほどの方向性も認められるだろうか。

なお、学問的な好奇心といえば心理学や精神分析に代表される観点がある。ジグムント・フロイト著*Das Unbehagen in der Kultur*（『文化においての違和感[二]』）では人の煩悩が募る一方、欲望を昇華する多々の状況があることを文化問題として描写している。文化は緊張と拮抗に満ちたもので、利害をめぐって葛藤しあう人間は、個人的にも心内で葛藤し、違和感（ウンベハーゲン）を覚える所以をいう。とりわけ欲しくても、満足を先送り、延期によるご褒美を相待つ姿に近代人の文化性を見出したという見解である。ノルベルト・エリアスはこのような心理学で発した考えを歴史社会学の文脈で受け、著名な文明論を提示した（*Über den Prozeß der Zivilisation*、『文明化の過程[三]』）。絶対主義の宮廷やギルドなどの場のマナーを分析して、中世社会での露骨で生々しい風勢が独特な交際の条件のもとで長期に渡って洗練されたと。そして人々の多くはその品を抑えさせられ、欲望の抑圧を余儀なくさせられたという。ハンカチの発祥、食卓の道具普及、異性との接し方、服装の変容、幅広くこのような過程で近代人は品性に伴う標準を無意識に受容継承していると。平穏を保証する働きもあれば、返って暴力および苦悩の因果にもなるとみ

る。図らずもコントロールが効かなくなり露骨な欲望や無骨さ若しくは実力行使が勃発するや、あるいは欲しい心を抑えられても、罪意識や内面的緊張感若しくは違和感が精神に多大な負担をかけていると結ぶ。

エリアスのエチケット変遷論は西洋史にのみ位置づけられ、文明的な作法を生み出す長期過程説以外の精神的なコントロール形成や羞恥心の有様が視野に入ってこなかった所から、歴史学や民俗学を中心に諸方から議論・批判も招いた。しかし作法及び欲望の抑えなどに関する心性形成史そのものは広く比較に値する。思うに、古来の文通（書札）も言動心性を検討する対象であろう。表現や、比喩、送付の作法、書式などに関する規範化、聞き取りなどの立ち振る舞いの歴史学は史料の豊かさに恵まれている。エチケットを分析し、なおかつ他言語圏と比較する条件はかなり揃っている。

『書札礼［付故實］』も父子で代々に伝わった、いわゆる秘本だ。内々の家の宝、故實とされたものながら、近世にいたって、結局『群書類従』の第九巻にて公刊された。この編集は誰のものかははっきりしない。湯治の合間で、舊草を閲覧し、餘閑をつかって纏めたというので、かなり余裕に恵まれたと思われる。ところで、後世の洞院実夏（一三六七年没）なるものがこの編集書[四]をみて、ごく限られた空間と時間の借り出しで返却刻が迫って、競二寸陰一（すんいんときそいて）書いたと言う。言い訳でなければ、マナーを巡る情報がいかに入手しにくいさまであったか伺える。後書きによれば「可レ令レ収二箱底一」（はこのそこにおさしむべ）き「秘書」として伝来し、そもそも知り得る人は少ない。「外見堅固可レ憚々々」（がいけんけんこにはばかるべしはばかるべし）と言う。笠松宏至も指摘したように、例外的に公家の間で『弘安礼節』のような申し合わせもあり、公共の芽生えはなかったと言えない。しかし、中世の夕暮れまでは家格の体系が頑丈で、故実の普遍化はなかなか展開しなかった。礼儀作法の大部分は故実の専有権及び支配権力への奉仕によって閉鎖されたからである。このような礼儀規範の閉鎖性はいかにも社会に必要な礼儀の一般性や普遍性と拮抗した歴史も注目に値する。

右で述べた伝授の空気の中では宛て書きについて不安が蔓延。人類の書簡文化と共通するのだが、例えば日本語の中世史料ではいわゆる上所が問題になった。氏名職名に「進上」・「謹上」・「謹々上」のどれを被せるかで、敬意の度合いが決まる。尊大、尾籠、艶、上品などの形容の中で差出人が演技

をして、多くは失敗や不安に陥った。『書札礼［付故實］』の条目では正誤に峻別しようとしても、判断でき兼ねる躊躇いを「思煩之時」と呼ぶ。大禮を右側に、無禮を左側にして、もともと安心を保証する筈であった思想の大義でも、逆に良し悪しの差別は悩み、不安となることがよく伝わっている。別書『書札作法書』でもこの事情を「書札煩ハシキ」ことと称している。やはり、人類文化の進化中、千年余りの伝授に秘められてきた「煩わしさ」という心性について議論したいものだ。

（国際日本文化研究センター教授）

一　共同研究「『かのように』という原理で形成してきた文通―『文書』概念や、その様式、記号、表象、意図性」（Formation and Changes of Correspondence—Texts as Seen in the Principle of 'As If'—Transpositions: The Term Monjo, Its Styles, Signs, Representations, and Intentions）の紹介。

二　日本ではよく『文明への不満』と訳される。一九三〇年刊。

三　一九三〇年刊。

四　蔵人・職事の文書を司る規定や模範が主な趣旨内容。源通具（一一七〇―一二二七）の名も見られるので、平安時代にかなり遡る規範が伺えると思われる。

「多文化間交渉における〈あいだ〉の研究」（通称〈あいだ〉研究会）レポート

村中　由美子

二〇一六年四月から二〇一八年八月にかけて、共同研究会「多文化間交渉における〈あいだ〉の研究」が開催された。[一]筆者は、二〇一六年四月から日本学術振興会特別研究員（PD）として日文研に所属することになったため、この研究会に参加させていただく幸運に恵まれた。本研究会は、二〇一三年から二〇一六年にかけて稲賀繁美氏の主催で行われた「海賊史観における世界の再構築」で俎上に載せられた問題系を継承するものであり、〈あいだ〉研究会からしか参加していない筆者は本研究会レポートの執筆者として甚だ不十分ではあるが、三年間の研究会が結実した論集『映しと移ろい――文化伝播の器と蝕変の実相』（花鳥社、二〇一九年）にも触れつつ、本研究会のレポートとさせていただく。

一　多彩な参加者を通して繰り広げられる化学反応

私事で恐縮だが、筆者は二〇〇九年九月から二〇一六年四